

資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	35
ページ	118-119
発行年	2003-07
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00028923

資料紹介

アラブ人とリーダーシップ

Khalil Aḥmad Khalil, *Al-'Arab wa-al-Qiyādah: Baḥṭh Ijtimā'ī fī Ma'nā al-Sulṭah wa-Dawr al-Qā'id*, Beirut, Dār al-Ḥadāthah lil-Ṭibā'ah wa-al-Nashr wa-al-Tawzī', 1985. 288pp.

2003年4月9日、バクダードが米英軍の手に落ち、イラクのサッダーム・フサイン（以下、フセイン）政権が事実上崩壊した。その20日後の4月29日、パレスチナでマフムード・アッバース内閣が発足し、ヤースィル・アラファート自治政府議長の権勢に陰りが見え始めた。

ジョージ・W・ブッシュ米政権が“自由”や“民主主義”といった美辞をふりかざし、中東地域への干渉を正当化するなか、アラブ諸国における“民主化”の可能性や問題点が盛んに議論されるようになってきている。その際、「“民主主義”とは何か？」という根本的かつ哲学的な問いとともに、アラブ諸国の政治体制に関して、次のような疑問が常に提起される。「アラブ世界各国（各地域）では、なぜ一人の“ザイーム”（za'im：指導者、首領）が長年にわたって権力の座にとどまることができるのか？」。

レバノンの著名な社会学者ハリール・アフマド・ハリールによる本書が出版されたのは、今から15年以上も前の1985年のことである。だが、“リーダーシップの社会学”（'ilm ijtimā' al-qiyādah）を提唱し、アラブ世界、とりわけ東アラブ地域における支配者と被支配者の関係の解明を試みた本書は今日もなお、フセイン大統領やアラファート議長を“ザイーム”たらしめた要因を究明する有効な手だてとしての価値を失っていない。

とりわけ、著者の造語である“イスティズラーム”（istizlām）は、絶対的な指導者を生み出すアラブ社会の問題を指摘するのにきわめて効果的な概念である。この用語は、シリア・レバノン方言で「男」、「野郎」、「子飼い」、「取り巻

き」を意味する“ザラメ”（zalameh）の語根「z」、「l」、「m」から作られた第10形動詞“イスタズラマ”（istazlama）の動名詞で、「子飼いを必要とすること」、「取り巻きを必要とすること」などと邦訳できる。すなわち、“ザイーム”のリーダーシップ すなわち、“ザアーム”（za'amah）は、“ザラメ”からなる少数の権力集団を不可欠とする、というのである。そして、この“ザラメ”は“ザイーム”に従属した存在であるにもかかわらず、権力から排除された大多数の人々を搾取する特権階級として位置づけられ、彼らのありようこそが、アラブ社会の停滞や不正を象徴していると結論づける。

ここにおいて、著者ハリールは、一貫して“イスティズラーム”を社会悪とみなし、それに対して批判的な立場をとっている。それゆえ、「アラブ世界には“イスティズラーム”があるから独裁体制を敷かざるを得ない」といった短絡的な結論が著者の意図に反していることは言うまでもない。だが、今日のアラブ社会がいまだに克服し得ない“イスティズラーム”という心性を改めて見つめ直すことで、“民主主義”や“自由”といった概念を自らの歴史的経験のなかで具体化する必要が、アラブ人のみならず、“ムスタアリブ”（musta'rib：アラブ人を追究する者）に喚起されるに違いない。

（青山弘之）

イランとグローバル化

Ali Mohammadi (ed.) *Iran Encountering Globalization; Problems and Prospects*, Routledge Curzon, 2003. xvi+263p.

書名から察せられるとおり、現在のイラン社会が直面する広範な政治・経済・社会問題を取り扱った論文集である。執筆陣はフレッド・ハリデーが序文を寄稿し、ホマー・カトウジアン

が一章を担当するなど、著名研究者を随所に配している。また、これまで一堂に会することが少なかった中堅・若手のイラン研究者（しかも米英在住に限らず、豪州・イラン国内の研究者を集めた）が中心となって多様なテーマを取り上げている。現在のイラン社会に興味を持つものが、全体としてどのような問題の切り口が存在するのか、などを考えるには格好の材料を提供しているであろう。ただし、以下に紹介するように内容がやや総花的に過ぎるため、個々の問題に対する掘り下げ方には物足りなさを感じる読者もおられるかも知れない。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 イランと政治的発展の問題
(Homayun Katouzian)
- 第2章 グローバル化時代のイランと近代的メディア (Ali Mohammadi)
- 第3章 イランの女性：イスラム化とグローバル化のはざままで (Ali Akbar Mahdi)
- 第4章 経済のグローバル化とイランにおける民主主義の展望 (G. Reza Ghorashi)

- 第5章 イランと世界金融市場
(Karman M. Dadkhah)
- 第6章 イラン経済とグローバル化の過程
(Hamid Zangeneh)
- 第7章 近代化と日常生活：イランにおける都市・農村の変化 (Ali Madanipour)
- 第8章 イランの経済発展と人的資源における構造変化 (Mohammad B. Beheshti)
- 第9章 イランにおける労働力の女性化
(Parvin Alizadeh & Barry Harper)
- 第10章 イラン人は移住帰国者 (return migration) をどう見るか (Hossein Adibi)
- 第11章 神権政治と民主主義：政党に関する議論 (Stephen Fairbanks)
- 第12章 第六議会選挙とイランにおける民主主義の展望 (Ali Mohammadi)

上記の各章は数章ずつ部にまとめられており、各部の冒頭に編者のモハンマディーが短い序文を載せている。

(岩崎葉子)